1930年代後半の崇貞学園点描
――教育活動・校舎増築を中心に

樽松　かほる

はじめに

崇貞学園（1921年から45年）の歴史的事象を知ることができる日本語の文書資料は、豊富とはいえない。加えて、資料のソースを、ほぼ清水安三の言説、すなわち安三の著作・叙述、とりわけ安三の後年の回想・記憶に立脚した記述に求めるという傾向もある[1]。発信元が限定的であるという傾向が否めない資料群の中で、比較的その時々の学園の歴史的事実を知ることができる資料として現在管見できたのは、「崇貞学校報告」・「崇貞女学校概要」・「崇貞女学校概要」・「崇貞学園一覧」・「崇貞学園概要」という寄付者に向けて発行されたと推測される学校案内の５つのパンフレットである[2]。また、1935年以降の資料としては、崇貞学園の機関紙『支那之友』がある[3]。『支那之友』も日本の寄付者向けへの広報紙であるが、現在桜美林大学では、刊行されたと推測される『支那之友』の50パーセント余り（大半はコピーである）を収集している。その他、外交史料館、アジア歴史資料センターには、補助金申請などの際に崇貞学園が提出した文書、外務省、大使館からの発信文書などが保存されている[4]。

ところで、桜美林学園では、学園の歴史を崇貞学園の創立から説き起こして編纂する方針のもと、現在学園史編纂事業が進められている。百年という時空を通じて崇貞学園の時代を捉えるという試みは、敗戦とともに消えた学校史とは異なる視点からの検討となろう。特に、桜美林学園の創立に全面的に安三とともに関わった清水郁子（旧姓小泉）が参画した1935年以降の崇貞学園の歴史を検証していくことは、そのまま桜美林学園建設にかけた創立者たちの想いや経営の手法を紐解く時、欠かせない作業であろう。

崇貞学園の歴史を取り上げた近年の著作として、李紅衛『清水安三と北京崇貞学園　近代における日中教育文化交流史の一断面』（不二出版、2009年）がある。この書物は、北京档案館が保管している中国側の資料や外交史料館などの資料を活用し、しかも当時の卒業生たちからの聞き取りを行うなどして、実証的に崇貞学園の歴史を明らかにしようと試みた意欲的な作品である。しかし、安三への関心が中心になっており、学校教育を時系列的に叙述しているわけではない。それに加えて、崇貞学園での日々の教育の実態を歴史的に検証しているとも言い難い。

学校史を編纂する場合、その叙述の中心となる部分は、学校における教育活動である。そこで、本稿では、1935年から40年あたりまでの崇貞学園の歴史的事象の中でも、教育活動と教育施設の増築に焦点をあてて追ってみる。

ところで、５つの「概要」・「一覧」について最初に述べたが、1935年以降の４、５年の間に発行されたと推測される３つの「概要」・「一覧」と、それ以前の２つの文書、つまり1922年の「報告」・「31年頃の概要」とを比較してみると、記述に違いが見られる。1935年以降刊行の３つの文書に共通して見られる記述が２点ある。

１、郁子が参画したことが記されている。

２、学校の設立理念、教育目標に関する記述が掲載されている。

加えて、「36年発行の一覧」と「38年頃の概要」には、建築に関する記述が多くみられる。

本稿では、紙幅の都合上、上記の１の点に着目して、1930年代後半に展開された崇貞学園の教育の実際に注目してみたい。あわせて、校舎増築にも論及していく。

すなわち、アメリカで教育科学を学んだ郁子は学園の経営に参加することによって、1935年から40年までの間の崇貞学園で、どのような教育を実践していたかを概観してみたい。

また、同時期崇貞学園では、多数の校舎建築が進められ、建築ラッシュの時代であったといっても過言ではない。教育施設がどのような目的で、どのような経緯で建築され、運用されていたのかを「概要」と『支那之友』を主たる資料として紹介してみたい。

１、崇貞学園参画までの小泉郁子（1892.10.2～ 1964.6.24）のプロフィール

「35年頃の概要」では、郁子のことを次のように紹介している。

「昭和十年七月東京青山女学院教授にして、東京女子高等師範学校、米国オベリン神学校、ミシガン大学教育学科卒業の履歴と多年の女子教育経験を有せる小泉郁子氏を、清水安三夫人として、また、本校の教務長として迎え得たのであります。」

郁子は、1915年東京女子高等師範学校を卒業、その後、長崎県立高等女学校、兵庫県明石女子師範学校の教諭を勤めた。東京女子高等師範学校の学生時代から「青鞜社」の運動に共鳴して婦人問題に関心を持っていたが、明石女子師範に奉職していた頃には関西婦人連合大会に参加するなどの活動をしていた。

なお、明石女子師範は、及川平治の「動的分団式教授法」で知られる大正自由主義教育のメッカと評された学校の一校であった。

郁子は、一介の女子師範学校の教員としての学生指導では飽き足らず、日本の全女性のリーダーを志して、1922年教職を辞して母校東京女子高等師範学校の研究科に籍を置き、東京帝国大学の聴講生になって、「社会学」や「心理学」などを学び、「女性心理研究」に取り組んでいた。しかし、郁子は、山室軍平の説教に触れ、女性の自立を強く自覚し、目指す女性像はキリスト教的な愛を基底とした社会への奉仕活動を行い、社会の改善に積極的に取り組む女性であるとの考えに至った。救世軍に入隊、さらなる勉学を志して、同年秋アメリカに留学した。

郁子は、渡米約１年半後の1924年２月、オバリン大学に入学した。ちなみに、ほぼ同時期に安三も留学していて、その連れ合い美穂とも、オバリン大学時代に交流があった。

郁子は、オバリン大学神学部を1927年５月首席で卒業した後、ミシガン大学大学院教育学専攻に進学した（1927年７月）。郁子は、ミシガン大学大学院部長に入学前にあてた書簡の中で、「私はミシガン大学で教育行政学を専攻したい。そして、私はまだ日本で一般的に実施されていない男女共学制度に強い関心を持っている。」と、述べている[5]。

郁子は大学院在学中、当時のアメリカの先端的な教育学、「教育科学」の学理や共学論を存分に学んだと推測される。その成果の一つとして、帰国（1930年４月）後の1931年『男女共学論』を公にしている。そして、青山学院女子専門部で教鞭をとるかたわら、婦人問題、男女共学論者として、言論活動を展開していた。さらに、母校東京女子高等師範学校の昇格運動、女子中等教員会の組織と運営、新教育協会理事、1934年ハワイで開催された汎太平洋婦人会議に正式代表としてガントレット恒との参加など、運動家、思想家としてその最前線に立って活躍していた。その間、上記の著書の他、『明日の女性教育』（1933年）、『女性は動く』（1935年）の２著を上梓している。その後まもなく、婦人問題の運動家である友人たちや家族の反対を押し切り、清水安三からのプロポーズを受け入れ、1935年７月北京に赴いた[6]。

郁子は結婚とともに崇貞学園のいわば経営者として、教育を指導し実践する場を得たのである。郁子は当初「教務長」として就任しているが、当時の中国の制度では、外国人が校長になることを禁じていたためと推測される。郁子は、最初から「校長」、「経営者」の役割を果たしていたと想像され、学内での教育の実行権をかなり委ねられていたと想像される。

郁子は、戦前の日本では稀有であったアメリカの教育科学の理論を崇貞学園でどのように実践していったのであろうか。

２、崇貞学園の教育に対する郁子の評価

郁子は、着任した当時の「崇貞学園」の教育をどのように評価していたのであろうか。その点を「崇貞学園に於ける労作教育の実際と其の効果」という文書を通じてみてみる。この文書は、北京に到着して１ヶ月も経たずして日本に戻った郁子が、汎太平洋新教育会議（８月開催）に参加した際の会議での報告である。

崇貞学園の教育は、工読主義によっている、労工と学習とが合体するのが工読主義であり、崇貞学園の工読主義は社会の必然性から産まれ出たものであると、崇貞学園の工読主義教育の特徴を押さえて次のように説明している。

「労作教育の主張の中には、単なる職業教育ではなく、『全人教育』、『体験教育』でなければならないとする主張がある、同時に経済的意義を包含する職業教育であるべきとの主張もある」。しかし、「吾が学園の工読主義教育は其のどちらにも偏していない。労働と学習とは完全に合体している。尤も、それは一般的労作的学習ということのみでなく、一定の労働時間を設け、特殊の経済的労働にも従事させている。すなわち、午前中は所謂、普通学科を課し、午後は支那刺繍の労工によってテーブルクロス、アップリケハンカチ、ビューローライナーなどを作らせている。

そうした労工を学童に課した理由は、一に学童が貧困の家庭より来るものであり、彼らにとって教育は単なるカルチャーでなく、また単なる将来に於ける成人生活への準備であることも許されなかったからである。彼らには、今日即刻生活の問題が差し迫っている。」

「今日、彼らは月々二弗から四弗位の収入を得ている。七歳位の子どもでも簡単なヘム取りをする事に依って、月々二弗は稼ぐのである。中学部の学生ならば、殆ど衣服、文具、昼飯を十分買いうるのである。そうした手工教育は生徒から親、姉妹たちへ、卒業生から隣人へ伝授せられて、今や北平朝陽門外に於ける一産物として、年間六十万円を生産しつつある。かくして往目の無道徳的細民街は次第に恒心ある中産階級への浮き上りつつある。」「かくして我が学園は完全に現社会と結び、教育は現実的生活に即しつつ、個人及社会をして向上の一路を辿らしめつつある。」と述べ、「学校は社会のものであり、社会は学校によって始めて、その存在を意義あらしめつつある」と、崇貞学園が位置する地域社会の課題を学校教育の場において実際に取り組み、解消発展に寄与していると評価している[7]。

地域社会の課題を学校における教育経験により改善し、地域社会を向上させているという事実は、まさに教育科学の立場における学校と社会の関係の理想の実現そのものである。その意味で、郁子はその当時の崇貞学園の教育を全面的に肯定している。

ちなみに、郁子が先の会議で報告した崇貞学園の労作教育の特徴や地域社会の中での学校の意義などについての同様の趣旨内容が、「35年頃の概要」において認められる。その事実からみて、郁子は北京入りしてからかなり早い段階から崇貞の経営に果敢に関わっていた、あるいは積極的に安三に助言をして自己の考えを「35年頃の概要」に反映させていたと推測される。

ところで、「工読教育」は、崇貞学園における特徴的な教育実践ではあったが、当時の中国にみられた特殊な教育方法であったとはいえない。

中国では、1920年初頭に急速に教育の民主化、すなわち平民教育が進展した。無論その背景には五四運動があったわけである。当時文盲は国民の80パーセントを占めていたといわれている。その状況に対して、例えば、北京師範学校の教師、学生が中心となり、「工読教育協会」を設立し、自ら市中に出て、半日文字学習、半日工作教育との「工読教育」の運動を展開していた。一方、

ジョン・デューイが1919年４月来華して、２年２か月の滞在中、各地を講演旅行して、いわゆるプラグマティズムの教育理論、方法を鼓吹した。さらに、その後ポール・モンローが実際教育調査社の招きで来華し、科学主義を提唱した。こうしたアメリカのプラグマティズムの教育理論を直接に学び、五四運動以来の文学改革の影響下、教育界でも文語体から口語体へと教科書を改訂する作業と相まって、中国は教育改革に向けて大きく始動していった。すなわち、1922年「新学制」が制定され、６・３制を導入、その実施のための「基準七か条」として、「１、社会進歩の需要に適応すること、 ２、平民教育の精神を発揮すること、 ３、個性の発展をはかること、 ４、国民の経済力に注意すること、 ５、生活教育を重視すること、 ６、教育を普及しやすくさせること、 ７，各地方に伸縮の余地を留めておくこと」を制定している[8]。

崇貞学園の「工読教育」は、当時の平民主義、工読主義の民衆教育拡大のなかで、生れはぐくまれてきた一面があったことも否めない事実であろう。

さて、崇貞学園の「工読教育」を高く評価していた郁子であったが、赴任当時の崇貞学園の教育について、次のような印象ももっていた。

「四年前私が初めて崇貞校に見えた時、彼女はあまりにもみすぼらしい存在であった。朔風に舞う黄塵の中にたった支那式家屋の四棟四教室、その中には百二十余の而も、その大多数が汚れた豚の子のような存在に見えた子らと六名の教師、それに一人の僕役が崇貞校の名によって織り込まれてあった。午前は学科、午後はたいてい作業、平和な雰囲気の中に、時々はあまりにモノトナスな毎日が繰り返されていたのだ」と、述懐している[9]。

「個性化」、「社会化」、「協調的団体意識による民主的社会の形成」は、20世紀初頭のアメリカの教育学が主張している普遍的な教育目標である。郁子は、その著『男女共学論』の中で、共学の提唱には３つの主要な目的があるとして、個性化、社会化、民主的社会形成を挙げている。そして、「個性的発展の方法」として、被教育者の能力、趣味、健康などを調査する個性調査部の設置、多様な学科課程の設置、課外活動、生徒自治会、各種定期公演会など、戦前の日本の学校教育では比較的等閑視されていた生徒の自発的な教育活動を主張している。それでは、郁子は「平和な中にもモノトナスな学校生活の日々」に対して、その後どのような挑戦をしていったのであろうか。

３、教育実践の事例

⑴　教科「体育」・「日本語」教育への取り組み

郁子が着任した頃の崇貞学園は、その当時の北京市の学校制度に基づいた学校であったと推測される。当然のことながら、カリキュラムは法令の範囲内において運用されていたと想像される。

郁子が特に改善を願って積極的に取り組んだ教科教育は、「体育」と「日本語」（「日語」）の教科であったのではないかと『支那之友』の紙面から想像される。体育教育と日本語教育において、どのような教育実践を試みていたかをみてみよう。

	小学部1～4年級	小学部5～6年級	中学部1年級	中学部2年級
聖書	1	1/2	1	1
社会	2			
公民		2		
歴史		2	2	2
地理		2	2	2
国語	8	7	7	7
算術	6	5	4	2
代数				2
日語	1	1	3	3
自然	2	2		
動植物			4	2
物理				2
習字	3	1		
手工	2		9	9
図画	1			
体操	1	1	1	1
唱歌	1	1/2	1	1
英語		2	3	3
衛生		2	1	1
校時	28	28	38	38

【1937年頃の崇貞小学部・中学部の学科課程表】
アジア歴史センター資料、H門　東方文化事業　６類
講演、視察及助成　助成関係雑件第四巻 B05015857800に
基づき筆者作成

［体育教育］

郁子は、「新生活運動といい、新秩序建設といい、いずれも敏排活発、キリスト教的生活を基調とする。而して、これは体育の更新に外をして求めることは不可能だ」と、記している[10]。郁子には、長い間の纏足や不労働の習慣を引きずり、機敏な動きに欠けている中国女性は不健康で消極的な女性と映ったであろう。

『支那之友』において、体育教育に関する記事が最初に登場するのは、12号（1936年６月）である（管見の限りの号数の内）。

「この秋から運動部員も作って健康第一の実を挙げようと思っています。」

「先週の土曜の午後は中学部のピンポン大会をいたしました。私たちは親子総出で応援しました。生徒の中には随分上手なのもあって、商品を幾重取りしたのがありました。賞品は夏季衛生思想の鼓吹もあって、蠅打ちや、衛生タオル、メンソレータムなどでした。清水はこの秋には外部の学校と試合をするといっています。」とある[11]。生徒たちのクラブ活動を奨励することにより、その実を上げる取り組みを実施していたのである。

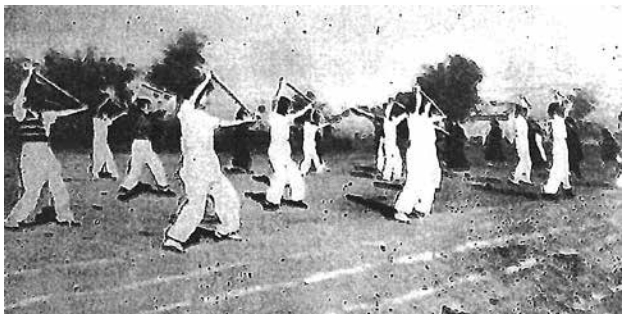
次に体育教育に関する記事は、日本からの専科教員の招聘についてである。1938年に、長尾貞子が北京に赴き、体育教育の指導にあたるようになった。以下は『支那之友』に寄せた安三の文章であるが、長尾の赴任により、崇貞学園の体育教育がどのように変化したのかが伺える。

「福岡から、女学校の位地をすてて、薄給に甘んじて新任し来れる長尾貞子女史を迎へて、学園の体育はこれから本式である。これにて長年頑張り来れる清水安三氏は免職、スエデン式体操は終りを告げる。わたくしは体操科をよして、これより、聖書を教えるつもり。」とある[12]。

長尾貞子は、当時の中国ではあまり実施されていなかった体育大会を一つの目標に据えて、生徒に草取りをさせたり、生徒とともにグランドを直線200メートルのトラック競技ができるように整備したりする一方、競技種目の指導を日本語と片言の中国語を用いて指導した[13]。さらに、体育大会に向けて小学生は黒いパンツ、中学生は白の上着と白のトレーパンとお揃いの体操着を揃えたという。郁子は個性尊重の立場から制服反対論者であったので、体操着を揃えることには当初消極的であったようである。中国人の教師からは、女の子が足など出してと眉をひそめる向きもあったという。

1938年11月３日、崇貞学園初めての体育大会が挙行された。演じられた種目は20種目以上で、当日の来会者は300名以上にのぼり、実に盛大、成功裡に終了したという。

長尾は体育大会の感想を、「一本のテープを目ざして、白線のコースをまっしぐらに力走している様子を見ると、そこに新しい支那の動きを感ずる。もう纏足の時代でも、柳腰の時代でも無い。これからの支那は、こうした力強い女性を要求して居る。私は毎日新しい希望を持って、彼らの将来を、たのしみながら働いている。」と述べている[14]。それに対して、郁子は、「長尾女史は我が崇貞学園を以て女性体育に先鞭をつける意気込みで、ヘビーをかけられた。結果はまさに驚くべきものがあった。」「小学部は全部中学部の運動選手を助教として指導の任にあたったのは教育的見地からも称賛に値することであった。」「我々は、将来崇貞学園に女子体育専修部を設置しやうと目論でいる。」と述べている[15]。



【演技をする小学部児童と中学部生徒】
上泉秀信『愛の建設者』(1939年) の英訳 "A JAPANESE PASTOR IN PEKING"
グラビア　A Field Day at the School の頁より。

次なる体育教育充実の作戦は、寒暑に関わらず存分に体育教育ができる体育館の建設であったであろう。体育館建設については「４，教育施設の充実」で述べる。

郁子は、生徒の体力増進と共に生徒の健康管理、衛生教育にも積極的であった。

「先般在奉天南満医大の出射氏が来平され、全生徒の健康診断」を実施したところ、「多少のトラホームの患者が発見され、早速手当を施すことになりましたが、大体は健康です。」と『支那之友』12号（1937年）で報告している。同時に、「学校を中心に朝陽門外民衆の衛生部を担当してもらいたい」と、学校を含めた地域医療も視野に入れた地域の健康の環境向上についての言及している[16]。更に1938年になると、北京天橋に日本基督教連盟時局奉仕部婦人部会によって設立するセツルメント「愛隣館」の医師として赴任した池永英子を早速校医として委嘱して、健康診断を実施している[17]。

加えて、学園医療班を設置している。「玫瑰寮の一室にベット、薬品戸棚、卓子、椅子等の設備を為し、一週一度校医の来診日を決め、洗眼其の他簡単な手当は、毎日医療班委員（指導教員一名を置く）の手で行いうる手筈である。我々はこの小さな医療班の発足が、将来崇貞病院建設の礎石となるように祈っている。」と、学内に衛生室を設置するにとどまらず、地域医療を視野にいれた抱負を語っている[18]。

上掲の崇貞学園のカリキュラムでは、「体操」を小学部、中学部ともに、週１時間設けているが、体育の授業数の拡大というより、体育教育の内容の改善とクラブ活動などの生徒の自主的な活動、健康教育によって、身体教育の改革を試みている。

［日本語教育］

先の時間割表を見ると、「日語」の時間は週３時間になっている。郁子は「昨年まで一週一時間であった日本語を今年度からは三時間とし、又清水は、日本留学を希望する特別班の生徒を毎日教えています。正科としての一時間も、実は大抵午後からの手工の時間に食い入って、一時半となり、二時間となることも珍しくありません。」と、『支那之友』の紙面に記している[19]。

日中戦争後の中華民国27年（1938年）８月24日に修正公布された「初級中学教学科目及各学期毎週教学時数表」によれば、「日語」は各学年各学期３時間となっている[20]。崇貞学園では、それより２年早く各学年３時間の日本語教育を実施していたのである。しかも、1936年９月以降、中学部での日本語の授業数の増加とともに、留学を目的とした特別クラスをすでに設けていたのである。当時、崇貞学園の日本語教育は、北京で比較的広く知られていたと思われ、後に崇貞学園からの派遣留学生の一人となった銭亜栄（1940年日本留学）は、「将来日本の女高師へ行かうという目的で、特に留日予備校とも云うべき我が校を選んだのです。」と、郁子は報告している[21]。

さらに、『支那之友』21号には、「明年から日本への留学の事が愈々実現されるというので、上級生は大喜びでした。」と記されている[22]。また、日本に留学した場合の生活環境の変化を考えて、留学予定の学生を自宅で同居させて指導にあたることもあったようである[23]。崇貞学園の卒業生が日本に初めて官費留学できるようになるのは翌年の1938年４月からであるが、その１年前にはすでに決定事項であったのである。

日本留学の予備教育機関として、北京興亜高級中学校（留日同学会設立）が1939年９月に開校している。そこでは初級中学卒業生を収容し予科半年本科２年、日本語を中心とした高級中学の課程を履修させて、日本留学の準備教育を実施していた[24]。崇貞学園では、それより２年以上前から留日予備教育に取り組んでいたのである。

ところで、阿部洋の研究によれば、その当時の中国から日本への対支文化事業による学費補給留学生制度には、特選留学生、選抜留学生、一般補給留学生があったという。その中の選抜留学生制度は、選抜権は日本側にあり、一人月約50円程度の学費が支給されていた、という[25]。崇貞学園からの留学生は、学校の推薦のみで留学でき、一人１ヶ月55円を支給されていたので、ほぼ選抜留学生制度に準じて実施されていたと推測される。崇貞学園からの派遣留学生は、1938年度５名、39年度は４名、40年度は６名にのぼっている[26]。派遣された留学生のなかには、崇貞学園出身以外の学生も含まれていた。病気などで途中帰国した者、学年短縮年度に遭遇した者を除いては、それぞれ、３年間の留学期間を終えて帰国している。留学した卒業生の多くは、帰国後崇貞学園の教師、愛隣館の医師などになって活躍している。

崇貞学園が中国女性の日本留学への一つの拠点となった背景には、崇貞学園の存在そのものが大東亜圏建設という当時の日本の国家政策に迎合していたからにほかならない。当時、郁子は、日本語教育にどのような認識をもって取り組んでいたのであろうか。

郁子は次のように述べている。「日本人と日本行き学生とのための支那事情というクラスで、随唐時代の日支関係に及び、今の時代と比較しつつ、当時の、日本留学生の長安行の華々しい有様を語り、又、随唐との文化的交渉並に留支帰還学生等と我国文化の発展ということを語るに到り感極った。そして、今日学園に在る日支両学生の責務の大なることに帰結したのであるが、留学候補者たちの顔は感激と興奮とに燃え輝いた。」と[27]。このように郁子は、日本への留学により交流の機会を深め、互いの文化を尊重しあう新しい「日支親善」の社会が実現できると信じていたと想像される。また、1938年以降、崇貞学園への訪問者、見学者が頻繁となり、忙しさが増していることに戸惑いを感じていたが、そうした場においても中国人を少しでも理解してほしいと思い、「一言の御はなしの中にも支那を語り、支那人を紹介する機会となしたい。」と語っている[28]。

さて、留学制度まで保障した崇貞学園の日本語教育であったが、次のような現実もあった。1940年当時の記事であるが、「本年は時世の反映とも云うべきか、退転出入者が常より多かった。退学する者は殆ど職を求めてゆくものである。それが又殆ど崇貞で習った日本語を頼りに就職するのである。外部から正式に求人の申込をさるる向も少くないが、又知らぬ間に闇取引の形で抜かれて了うものもある。それが日本語をいくらか知っているという計りに、又、それが崇貞の学生であるということだけで、無条件に引き抜かれてゆくのである。」とある。

郁子は、生徒たちに日本語力を積極的に身につけさせようとしながらも、日本語力が安価な労働力と化していくことを嘆いているのである[29]。

⑵　教科外教育における取り組み

［自治会活動］

生徒の自発的活動を奨励する一つの方策として、1937年春ごろ自治会が組織され、その活動に関する記事が『支那之友』の紙面に登場している。

「生徒の自治会は、毎週一回、チャペルの時間に講演会を催すことになりました。」「丁度その講演会に来迎せられた近江兄弟社の方並びに目下留学中の慶応大学教授奥野氏等」とある[30]。20号（1937年３月）の記事にも「丁度外務省から田村理事官が見えましたので、新年に関する一場の講演をしていただきました。」とあり、自治会活動の一環として来訪者を講演者として招き、生徒たちが見聞を広げる取り組みをしている。

さらに、「二十九日には、生徒主催の自治会を開催しました。席上崇貞学園の長短といふ様な事を反省的に討議しました。長所として挙げられた点は、（一）家族的であること、（二）国際愛を実行しつつあること、などが主なるものであり、短所、といったものは生徒自身には考えつかなかったですが、私の目からみて、（一）時間の観念が未だ十分でないこと、（二）労働への精進が未だ不十分なること等を指摘しました。」と報告している[31]。やや、誘導尋問的な指導の事例ではあるが、自分たちの現実の中の課題を自ら捉え、自ら改善していく訓練としての実践であったのであろう。

生徒の自主的活動の一環として、1938年秋「購買部」を設置している。「今秋から中学部の生徒数も増加した上に、一面物価高騰に備えるため、学園生徒自治会の発議により、新たに委員五名を以て本格的な購買組合を組織し、先生二名を指導委員として、学用品、日用品（家庭用品）の販売を開始することになった。額は小さいが購買部の収益は、自治会の活動資金に供することになった。」と報告している[32]。

⑶　教育制度に関する取り組み

［共学制の実施］

郁子は『男女共学論』のなかで、共学制を次のように定義している。

「男女共学とは、被教育者たる男女を同一学舎に収容し、その個性及学科の性質に鑑みて男女の分合を按配し、以て被教育者の必要及社会の要求に最も適切なる教養を施す」。

『支那之友』の紙面によれば、共学制度が崇貞学園に導入されたのは、1938年９月からである。小学部に男子一学級を設け、男子の入学者は31名と記されている[33]。

郁子は、崇貞学園での共学を実施する意義を次のように説明している。「今や、支那国民教育改造の秋、特にかの国民党政府によってなされた排日教育を排除し、これに代うるに親善敦睦の理想をもってせんとするに際して、我々の関心はどうしても男児の上に及ばざるを得ない」と[34]。「日支親善」をより浸透するためには、男子を含んだ教育機関であるべきとする考えが見うけられるが、共学制による教育実践の様子については語られていない。郁子の「共学」主張、すなわち「性差によらず個性による」教育がどう具体的に展開されていたのは、目下のところ不詳である。

「共学」の創始者というべきエレン・ケイが最初に提言した「共学」は、階級打破を目的とした学校改革であった。すなわち、学ぶ場の平等により階級制を解消していくというものであった。「共学」とは、歴史的に作られた差異に基づいた差別的教育の解消にその根本的意義がある。そのような「共学」の本来的な概念からするならば、次の奨学金制度への取り組みなども、「共学」の思想からのひとつの実践例といえるであろう。

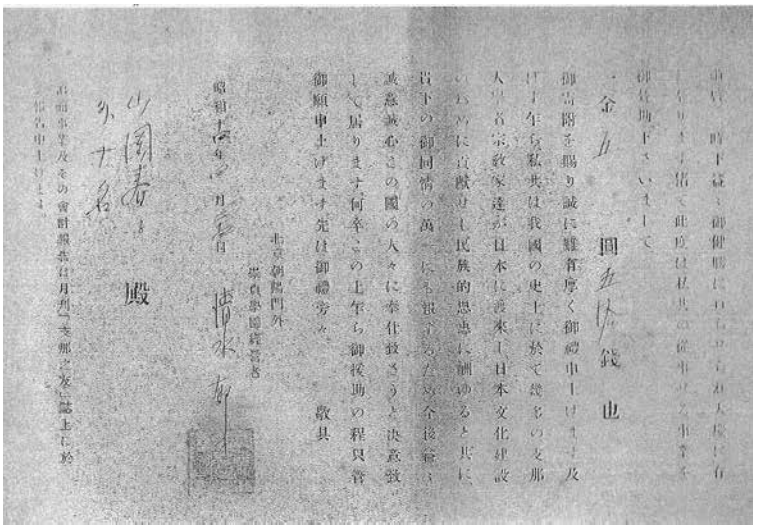
［奨学金制度］

「教育の個性化」の方策として注目されるのは、留学制度の外、奨学金制度がある。優秀な生徒に崇貞学園内で学ぶ機会を与えるために設けられたが、いつ頃から実施されたのか、その額や対象、制度の種類などその全容は現在不詳である。

事例として確認できる記述としては、以下の文章などがある。

「ことし市内各小学校の卒業生中、学業品行、優秀にして、而も家計が豊かならざるものといふことを目標にしてとった。極貧者には免費（一学期参元の雑費）という恩典も加へた。しかし、その数には限りがあるので、約四十名を選抜したが、更にセレクトした結果今は三十一名である。」と記されている[35]。また、1940年３月の記事であるが、「昨年の冬、学園は文芸会利益金の中、五百円を奨学資金にあて、毎月若干の給費生（月謝宿舎費とも免除）をつくることにしたのであるが、物価の急騰した今日、最初一人に対して五円、六円といった予算は、もう事実上三倍になっている。五百円の準備金など何程の役にも立たない。」と、記している[36]。さらに、1942年度の「収支決算」には、「奨学金及び免費」の項が設けられていて、各学級３番まで「免費」（授業料免除）の対象にしたとの報告が見られる[37]。

生徒への財政支援策としては、その他、給付金を支給していたケースもある。1939年10月頃、給付金を受けて通学していた生徒は、４名にのぼるという。「一ヶ月五円或は五円五十銭をサポートして下さる方の同情をお受けしているのである。その一人は、岸和田市で山岡春子女史が一人五十銭宛十一人の方々を語らって毎月五円五十銭をお送りくださる。もう一人は静岡英和女学校の方々、一人のために一ヶ年五十円をお送り下さる。」などと報じている[38]。山岡春は、岸和田の婦人会々長や第一回婦人会全関西大会の発起人会座長を務めるなどの経歴を持つ婦人運動家である。こうした寄付に対して、崇貞学園では領収書やお礼状を出していた他、『支那之友』の紙面で報告している。



【清水郁子から山岡春、外十名に宛てた領収書　1939年４月24日の日付】『山岡春関係文書』所収。なお同文書には、崇貞学園及び愛隣館への寄付に関する文書、郁子からの手紙などが含まれている。

４、教育施設の充実

より高い教育実践のためには、教育施設の整備は欠かせない課題である。

前述したことだが、郁子が崇貞学園に赴任した頃は、建造物は４棟、４教室であったという。ところが、1945年11月８日北京市に接収された崇貞学園の建物は、大小22棟であったという。安三は「その日接収された建築物は体育館一棟、講堂一棟、教室二棟、教員室応接室一棟、理化学教室一棟、家政教室一棟、図書館一棟、社会隣保館一棟、寄宿舎十四棟、門番室一棟等で計

二十二棟であった。」と戦後語っている[39]。「社会隣保館」とは、「天橋愛隣館」の建物のことであるが、当時崇貞学園所有であったので、これを含めての数である。10年間に18棟の建物を建設したことになるが、その経緯について不詳部分が多い。ここでは、30年代後半の校舎建築について触れる。

1936年10月発行の「崇貞学園一覧」と「38年頃の概要」に記載されている1935年以降の校舎建築に関する情報をまず確認してみよう。前者によれば、「本年清水夫妻は帰国、広く中学部校舎、科学館、講堂の建築費及び敷地拡張を与へらんことを訴えた。（中略）人々の同情に依て今日茲に校舎、講堂、科学館、門と門房及墻を建築しその落成式を挙げるに至ったのである。」とある。

後者には、「翌十一年、清水氏夫妻は日本に帰国し、広く江湖に訴えて、中学部校舎、講堂、科学館の建設費及び校地拡張費の与へられんことを祈り求めた。居ること数月、祈願は早くも応へられ、同秋には約三万円の資金を以て、叙上の拡張案を実現することを得」て、1936年10月17日に落成式を挙行した。現在、「七千坪の校地に、新旧校舎八棟」となったと報告されている。

以上の二つの文書内容を換言すれば次のようになる。1936年に安三、郁子共に帰国して、数か月にわたり募金活動を行った。秋には、講堂、中学部校舎、科学館、門房などの建築に必要な資金が集まり、10月に落成式を挙行した。1938年ごろまでに、新旧校舎は全部で８棟となったということになる。なお、「崇貞学園一覧」に中山龍次寄贈の「建築中の科学館」の写真、「38年頃の概要」には「校舎及び講堂」の写真が掲載されている。

この時期に校舎建設を企てた背景には、1936年の「初級中学部」の開設が関与していたと推測される。すなわち、生徒数の増大と共に、より教育を高次に発展できる教育施設の充実が必要との考えに立ってのことであろう。

ちなみに、安三、郁子が帰国して行った募金活動の中には、軽井沢で三浦環の独唱会を開催したと推測される資料も存在するが、実施されたか否かを確定できる資料は現在のところ発見されていない[40]。

【正門】1936年頃に建築。

【講堂（礼拝堂）と校舎】1936年頃に建築。

ところで、1939年から40年にかけて、寄宿舎、図書館、校舎、体育館の建設がほぼ同時期に取り組まれ完成している。

1936年の落成式以降の校舎建築に関する情報を『支那之友』の紙面に求めてみる。郁子は、『支那之友』38号に「新装成らむとする学園」のタイトルを掲げ、寄宿舎、図書館、体育館、校舎の建築の経緯について語っている。「拾万円の建築資金目標を掲げて募金に着手したのは昨年の四月末、五月六月は書面の発送に全校教職員生徒一同大同であった。約三万人のクリスチャン各教会、各基督教々化機関に属する方々を目掛けて、アッピールした。それによって、校舎、寄宿舎、ギムナジュームを建設し、時代の要求に順応しうる教育機関を目指した」と、述べている。すな

わち、1938年春に、校舎、寄宿舎、体育館の建築のための資金として10万円の募金活動を開始したのである。「秋になって漸く、約一万円の資金が与えられるという見極めがついた。」とある[41]。その後、募金は増えたようであったが、結果13,000円にとどまったという。資金が大幅に不足する中で、どのようにして計画した校舎を建設していったのであろうか。

［棗（なつめ）寮の建設］

募金活動と平行しているころの1938年、寄宿舎を取得することができた。紙面では、次のように報じている。寄宿舎は「新建築といふ処には無論至らなかったが、ついに校地に近接した民屋を、土地とも弐千弐百円を以て購い、これに、三千余円を投じて改修築を施し（冬季暖房装置から　非常警備まで）九月一日から開設、二十五名の姑娘を止宿せしめた。今日まで寄宿舎は常に入舎志願者超過で成績は良好である。」というのである[42]。庭に沢山の棗の木が植えられていたことから、安三は同寄宿舎を「棗寮」と名付けた。

入学してきた日本人部の学生が、棗寮に入寮した。日中戦争勃発前後から中国国内に日本人、朝鮮人が急増してきたことが背景にあって、日本人部の開設を計画した。遠距離からの志願者のために寮の設置が必要であったのである。こうして、崇貞学園は朝陽門外の人々を主たる対象とした地域の学校から、より広い地域から中国人、日本人、朝鮮人の学生が集まる学校へ変化していった。

寮が完成すると、安三一家は城内の東堂子胡同22号の住居（元李鴻章所有であったが、近江兄弟社所有となっていた）から棗寮内の一棟に移り住んだ。安三と郁子は、食事も寮生と一緒という生活をしていた。

城内の旧居後は、引期続き近江兄弟社の事務所、店員宿泊所などに使用されたが、加えて同所に新たに「北京日本人基督教会」（牧師、清水安三）が設立された[43]。

【棗寮内の安三・郁子住居後】
1938年から45年（接収まで）の間使用していた。1986年、桜美林学園から教職員が朝陽中学（崇貞学園後）を訪問した時の撮影。

［図書館の建設］

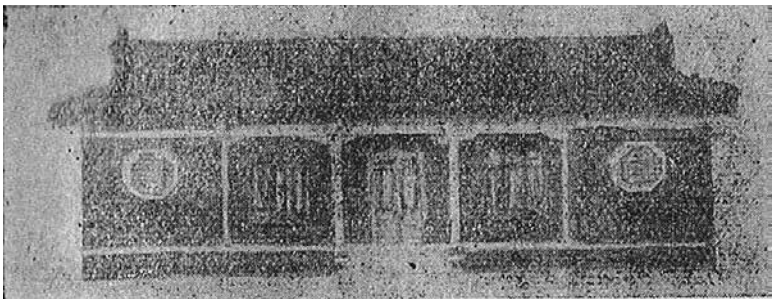
図書館は当初の建築計画にはなかったが、1938年暮、中国人の篤志家王雨生より図書館を寄贈したいという申し出があった。翌年に入り施工、建築費12,000円、1939年11月に完成した。

安三が、当時の図書館の館内の様子が彷彿と伝わってくるような一文を残しているので、一部紹介したい。

「崇貞学園には可愛い小さい王宮があった。入り口には大理石の獅子が、左右にたたずんでいた。大抵の処の獅子は座っているが、その獅子は歩いているところだった。雄獅子の方にはその耳たぶに赤坊の獅子が喰いついてぶら下がっていた。牝獅子の方には腹の下に乳房にすがる獅子

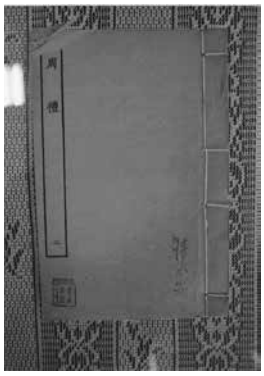
の赤ちゃんがいた。外観は中国風の宮殿造であったが、鉄筋コンクリートで、内部は全然洋風だった。」「私共はこの建物を図書館とミュージアムとに用いていた。地下室には書棚をぎっしり作って、一階はミュージアム、中二階に読書室を設けて置いた。」「そのミュージアムには私の長年に亘り蒐集せし、コレクションが硝子箱の中に入れられて、陳列されてあった。」「甘粛出土の壺、三代の色彩せる土器。硬い金槌でたたいても折れぬ大理石に似たる石斧、石器、硝子玉、（中略）皆ずらりと揃えておいた。（中略）歴史の参考品として値高いものばかりであった。」「図書館の地下室には、四千八百冊の和、漢、洋の本があった。それらは私どもの生涯の伴侶であった。」「これらの書物には蔵書印も捺してあるし、洋書にはサインが一冊々々の書扉の一隅に認めてある。」と書き記している[44]。

一方、郁子は、ミュージアムの陳列品にはたいしたものはないが、生徒たちにとって「時代の観念を与えようとする貴重な直感材料なのである。将来はせめて北京人の頭蓋骨一つ位は並べたいものだと思う。」「図書館は地域の教化機関として期待できるものである。」と語っている[45]。



【建設中の図書館全景】
松井秀吉「北京に輝く崇貞学園」
清水安三著『姑娘の父母』（1939年）所収。

【図書館前の獅子と学生】



【安三のサイン（右下）と崇貞学園の蔵書印（左下）がある漢籍】
接収された漢籍の一部が現在の陳経綸中学に保管されているが、その内の１冊。

［校舎の建設］

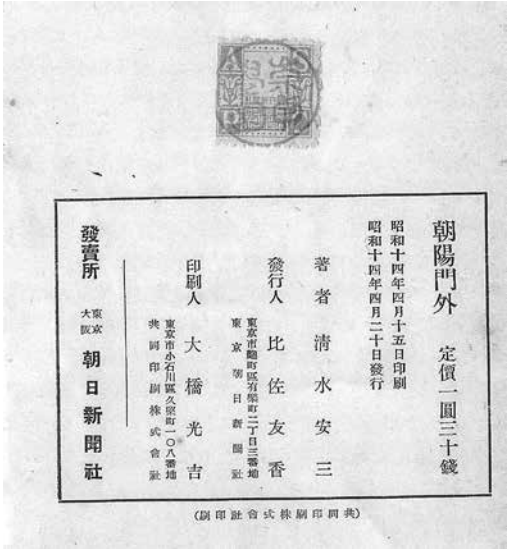
1937年、日中戦争が勃発すると、北京の人口は急増し、崇貞学園への入学者も大幅に増加して教室の不足は深刻となった。従来の教室定員25名主義を廃して40名としたが、80名２クラスという状態で、礼拝堂も分散して使用しても、あふれんばかりであったという。教員室、教室も押すな押すなの狭隘ぶりで、教室の増築はどうしても解決しければならない課題となっていた。そこで、先の募金活動を実施したわけである。クリスマスの献金なども集めて、寄付金はようやく約16,000円に達したが、なお、足りなかった。そのような中で、「まずは当たってみようとなり、各種のプランの中から選抜された、五十名定員の六教室、三十五人定員の二教室を有する二階建ての建物は終に、弐万四千円という契約に落ちた。」「次に来るものは八千円の資金調達策である。」「家にある金といふ金は全部つぎ込んでみた。」なお、5,600円の不足であった。更に机などの購入費を入れるとプラス2,000円必要である。「能う限りは自力といふので、清水は原稿書きを決意す

るに至ったのである。」と記されている[46]。

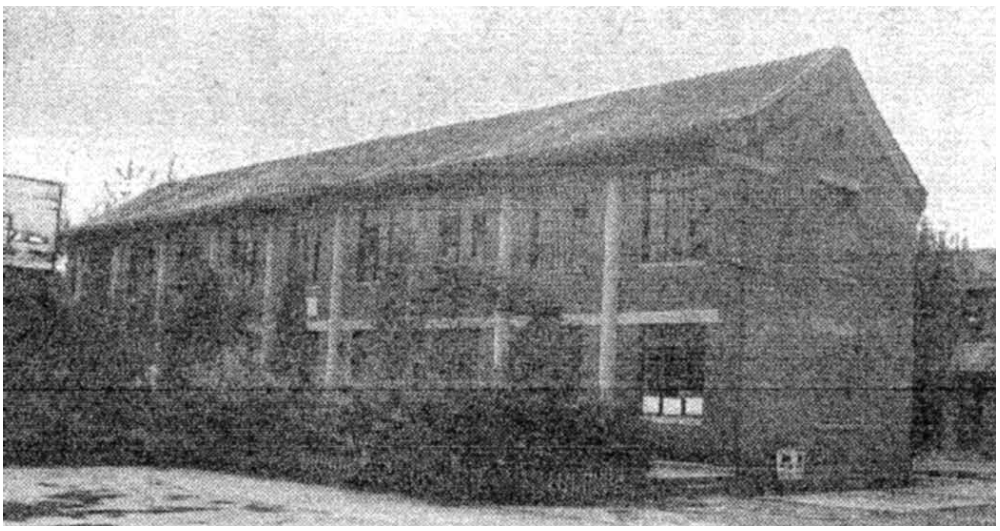
以上の事情があって出版したのが、1939年に刊行した『姑娘の父母』と『朝陽門外』である。安三は、『朝陽門外』の「自序」で次のように述べている。「わたくしの北京朝陽門外に於て為したる体験は、わたくし自らの一張羅である。」「この一張羅のきものも、惜みなく脱ぎ捨てて崇貞学園の建築資金のために、寄附することにした。」「自分自身の体験はただ一つであって、『姑娘の父母』が女の黒髪ならば、『朝陽門外』は女の体そのものである。今、わたくしは黒髪をぷっつり切って売り飛ばし、思ひ切って体をお金に換へむと欲する。」「こんなものを書くのは、実はかんばしいことでも何でもない。しかし、女が黒髪を売り、身を沈めてお金を得る如く、わたくしは、決然これらの書物を上梓するのである。」（現在から見れば、はなはだ不適切な表現であるが、歴史上の史料という性格を考え、そのまま引用した。）

こうした経緯で建てられた校舎は、二階の両脇が手工室、中学１年の教室、一階の１室が教員室、残り５教室は全部小学部の教室に充てられた。切り詰めた予算であったため、トイレも水道も電気もつけることができなかったという[47]。

なお、『朝陽門外』の奥付には「崇貞学園」の印が捺されている。


朝陽門外　定價一圓三十錢
昭和十四年四月十五日印刷
昭和十四年四月二十日發行
著者　清水安三
發行人　比佐友香
東京市麹町區有楽町二丁目三番地
東京朝日新聞社
印刷人　大橋光吉
東京市小石川區久堅町一〇八番地
共同印刷株式會社
發賣所　東京大阪　朝日新聞社
（共同印刷株式會社印刷）

【『朝陽門外』の奥付頁】
「崇貞学園」の印が捺印されている。



【1939年建築校舎】
1986年、桜美林学園から教職員が朝陽中学（崇学園後）を訪問した時の撮影。

［体育館の建設］

建築計画の中で、一番の難関は体育館であったという。

郁子は、体育館の必要性について次のように語っている。「女性の体育に就いてまだ正しい教育的認識を持たない支那に在って、我々其道に先鞭をつけたいという願望を持っているのであるが、これがために必須欠く可からざるものは体育館である。寒暑共に激しく、且つ、春先に、蒙古風の来襲をうける北支では戸外での体操は殆ど一年に数える程しか出来ない。五月も半ばのこの頃ではもうそろそろ日射病が始まり出した。こうした環境に在って、体育館の建設は学園の歴史に新しい一頁を加えるもの」と、述べている[48]。

体育館の建築費に関しては、1938年のかなり早い時期から外務省対支文化事業部に申請をしていたようであるが、38年の12月、全額35,000円が支給される約束がなされ、三期に分けての建設が実施されることになった。13年度（1938年）予算として、第一期計画の12,000円が支給されることになり、体育館の中央本体部分の建設が実施された。なお、1939年５月発行の38号には、「体育館の骨組」の写真が掲載されているが、第一期の工事が完了したのは1939年11月であった。

【第二期工事で完成して煉瓦の野外スタンドに立つ生徒たち】
運動会などが開催されたときに観覧席として使用された。

第一期工事に引き続いて、第二期工事が進められた。第二期工事は野外運動場、スポーツ施設などの建設であった。トラック競技ができる運動場を見通せる場所に350人ほどが入れる煉瓦のスタンドの建設の他、バスケットボールコート、テニスコート、ランニング競技ができる運動場の整備などであった。テニスコートは講堂（礼拝堂）の横に設置された。

こうした野外施設も11月15日に完了した[49]。

第三期工事は、「本年（1940年）二月更に、当局より下附せられし、体育館完成費の中、二万一千円を以て、起工、北側にステージを南側に体育教員室、体育具置場、シャワーバス六ケ、水洗式便所、洗面所各々四ケ所、楼上を映写室、ピンポン室、体育舞踊研究室などに充てることにした。」「結局四千円の予算超過であるがいかんともすることが出来なかった。しかし、ともかく、これから支那女性体育のために乗り出せると思うと喜びを禁じえない。」とある[50]。一期工事で完成した体育館の本体部分の右と左の両側を増築し、体育館は完成したのである。1940年５月15日、

体育館の落成式が行なわれた。

ちなみに、戦前国家が私学に対して資金を援助して校舎を建つという例は極めて稀である。国家が時の国家政策に特に有効と認めた場合のみ起こり得る現象である。大東亜建設を掲げて侵略をおし進めていた日本政府にとって、当時の崇貞学園はまたとない宣伝材料であったのであろう。

同年６月30日、付近住民を対象とした日本紹介の映画会を体育館で開催している[51]。早速、体育館を活用して民衆教化の役割を果たしているである。

【完成した体育館全景】
1986年、桜美林学園から教職員が朝陽中学（崇貞学園後）を訪問した時の撮影。

おわりに

本稿では、1930年代後半の崇貞学園の教育の実態と教育施設の拡張を取り上げ、紹介することを目的としたが、それを通じて教育科学を提唱する郁子を中心とした教育実践の一部を明らかにした。体育館までも取得しての体育教育の充実、留学制度に結び付けた日本語教育など、水準の高い教科教育への展開が認められる。また、生徒の自主的活動の指導、能力のある生徒に対する財政的援助方策など、個性尊重の教育実践にも果敢に取り組んでいた。郁子の崇貞学園での教育実践は、教育科学の理論を学んだ者としての面目躍如たるものがある。当時の崇貞学園は、郁子の教育主張の一つの実験場であったといっても過言でない。

しかし、主張がある具体的な形となって達成されたのは、同時期日中戦争という御し難い現実の進行した時期であり、その現実が崇貞学園の教育を回転させた力となった。それが郁子の教育学思想に基づく実践への努力をはるかに超えた大きな力となって崇貞学園の教育を動かしていった側面があったことは否めない事実であろう。今後、その面からの実証的な検証が必要である。

この点と関連して、本稿において、郁子の中国への理解を示す「日支親善」への想いを日本語教育と見学者への対応に関するところで紹介した。しかし、その反面、郁子は次のようにも述べている。「日支親善、日支提携工作が歩一歩とすすみつつあることである。これは一面否定せんとして否定し得ざる力の善き顕れであり、又、我々の祝福措かざる処である。」「ああした満州の

異常なるそして神速なる発達は、わが皇軍の息吹なくてはできることではない。」と[52]。一方における日本の中国侵略を是としている言説、他方に於ける崇貞の生徒たちへの深い同情と真摯な教育実践、この双方の関係についても今後、考うべき課題である。

本稿では、1935年以降の２回にわたる建築計画と実現への過程を明らかにすることができた。日々の教育上の工夫や試みだけでは、理想とする教育を実現できないとする考えから、講堂、図書館、体育館といういわば特別室を建設したのであろう。しかも、注目すべきは、校地の中のそれぞれの建物の置かれた位置関係である。すなわち、校庭を中央にして北に礼拝堂でもあった講堂を建て、庭を挟んで講堂の真向いの南側に普通教室の校舎、校舎からみて、庭の右側（東）に体育館、庭の左側（西）に図書館が向かいあって配置されている。神（礼拝堂）と人（校舎）との関係、その両脇に知を意味する図書館、体を代表する体育館が建てられているのである。崇貞学園の教育理念を校舎の配置によって表現しているといえるであろう。

なお、敗戦により北京市に接収された校舎は、1990年陳経綸中学が設立して新築校舎を建てるまでの45年間、中学校の校舎として使用されていた。

注

[1] 初出以外の箇所では、清水安三を安三と、清水郁子（旧姓小泉）を郁子と記すのを原則とする。

[2]「崇貞学校報告」（1922年９月、北京東総布胡同　十七号、清水安三、外交史料館所蔵）、「崇貞女学校概要」（中華民国北平朝陽門外神路街　崇貞女学校、外交史料館所蔵）は、校舎建築、秦賓に関する記事内容から1931年ごろの発行と推測される。「崇貞女学校概要　支那人教育　支那人伝道　セツルメント」（北平朝陽門外、桜美林大学所蔵）は、発行時期の記載がない。しかし、文中の「一粒の麦地に落ちて死なずば」は『少女の友』（1935年11月）に所収されている。また、文中の「外務省対支文化事業部より1,000円の書籍購入費補助」は、1935年11月に崇貞学園に下附されている。これらのことから、発行時期は35年11月から翌年の早い時期と推測される。そこで、本稿では「35年頃の概要」と表記する。「崇貞学園一覧　『支那之友』特別号」（1936年10月、（発行所）北平朝陽門外芳草地　崇貞女学校、東京大学東洋文化研究所所蔵）は日本語・中国語文11頁、英文５頁の冊子形態である。「崇貞学園概要」（北京朝陽門外　崇貞女学校、北京档案館所蔵）は、留学生に関する記述があることから1938年以降の発行と推測されるが、39年の校舎建築に触れていないことから、その間の発行となるので、本稿では「38年頃の概要」とした。

[3]『支那之友』の発刊は、『昭和十二年日本組合教会便覧』によれば、1935年８月。現在断片的な号数しか収集できていない。手許にあるもっとも号数の早いものでは、12号、36年６月、もっとも遅いものでは、60号、44年４月であり、全部で31号を把握している。なお、同紙については、太田哲男「『支那之友』と『愛隣』――戦時下の清水安三の活動を伝える史料」『清水安三・郁子研究』５号、2013年に詳しい。

[4] 外交史料館、アジア歴史資料センターに保存されている崇貞学園関係の資料収集は継続中である。また、中国側の資料、特に、北京档案館保管の崇貞学園に関する資料は一部収集している。

[5] 郁子からミシガン大学大学院学部長A.H.Loydにあてた1927年５月６日付の書簡を翻訳、拙書『小泉郁子の研究』学文社、2000年、83頁参照。

[6] 太田哲男の教示により、安三と郁子が35年７月７日に天津の教会で結婚式を挙げたことを報告した西田天香に宛てた書簡があることを知った。『湖畔の声』にも、結婚式に関する同様の記述がある。なお、入籍は1936年２月13日。

[7] 清水郁子「崇貞学園に於ける労作教育の実際と其の効果」『汎太平洋新教育会議報告書』新教育協会編、1936年１月、293頁～95頁の記述からの抜粋。

[8] 斎藤秋男･新島淳良『中国現代教育史』、国土社、1962年、116頁。なお、安三も中国に滞在中のデューイに出会っていた。安三とデューイの関係については別の機会に論じたい。

[9] 清水郁子「伸び行く日本、伸び行く学園」『支那之友』37号、1939年３月。

[10] 清水郁子「学園のこのごろ」『支那之友』41号、1939年11月。

[11] 郁子「北平だより」『支那之友』12号、1936年６月、４面。

[12] 清水安三「折に触れて　崇貞に秋立つ」『支那之友』33号、1938年９月。

[13] 長尾貞子「学園に任を得て」『支那之友』34号、1938年10月。

[14] 長尾貞子「体育大会の記」『支那之友』35号、1938年12月。

[15]「崇貞キャンパス点描　運動会の印象」35号。

[16] 郁子「北平だより」『支那之友』12号、1936年６月。

[17]「崇貞キャンパス点描　女医を迎へて身体検査」『支那之友』34号。

[18]「崇貞キャンパス点描　医療班の開設」『支那之友』35号。

[19] 郁子「北平だより」『支那之友』18号、1937年１月。

[20] 興亜院華北連絡部『北支に於ける文教の現状』興亜院華北連絡部、1941年７月、85から86頁。

[21] 郁子「崇貞学園だより」『支那之友』20号、1937年３月。銭亜栄は第３回派遣留学生の一人として、青山学院女子専門部に留学、帰国後崇貞学園の教師となる。
[22] 郁子「崇貞学園だより」『支那之友』21号、1937年４月。
[23] 清水安三『支那人の魂を掴む』創造社、1943年、148頁以下に留学候補生に関する記述参照。後に留学生となった白玉琴が清水の家に来て一時住んでいた記事は150頁。
[24] 前掲、興亜院華北連絡部『北支に於ける文教の現状』104頁。
[25] 阿部洋『「対支文化事業」の研究　――戦前期日中教育文化交流の展開と挫折』汲古書院、2004年、601から603頁。
[26] 崇貞学園生徒の留学については、拙稿「北京崇貞学園への日本政府の財政援助」、共著『戦時下のキリス教主義学校』教文館、2017年、を参照。
[27]「キャンパス点描　留学生と日語熱」『支那之友』44号、1940年３月。
[28] 清水郁子「学園のこのごろ　遠足中継地」『支那之友』41号、1939年11月。
[29] 前掲、「キャンパス点描　留学生と日語熱」『支那之友』44号。
[30] 郁子「「北平だより」『支那之友』18号。
[31] 郁子「崇貞学園だより」『支那之友』20号。
[32]「崇貞キャンパス点描」『支那之友』35号。
[33] 前掲、「崇貞キャンパス点描　粒の揃った中学生」『支那之友』34号。
[34] 同前。
[35] 同前。
[36] 前掲、「キャンパス点描　世相を映す学生層」『支那之友』44号。
[37] 郁子「学園だより　昭和十七年度事業報告　２，奨学金及び免費」『支那之友』60号、1944年４月。
[38] 清水郁子「学園のこのごろ　涙を呑んで働く姑娘」41号。
[39] 清水安三「回顧二十年」『復活の丘』79号、1956年10月。
[40]「身分証明書下附願　　私議今回長野県軽井沢町集会堂ニ於テ崇貞女学校ノ建築資金ノ一部ヲ得ルタメニ三浦環女史ノ独唱会ヲ開催致度候ニ就イテハ右許可願ニ添ヘテ所轄役場ニ身分証明書ヲ提出ノ要有之候ニ就キ右一通御下附相成度御願申上候也　　昭和十一年八月ニ十四日」の文面の文書（毛筆書き、安三の筆跡と推測、欄外に「決済」の印、「第二課長　「宮崎」のサインがある）が、外交資料館所蔵文書の中に含まれている。
[41] 清水郁子「新装らむとする学園」『支那之友』38号。
[42] 同前。
[43] 伊藤「新装の北京教会」『支那之友』34号。前掲『北支に於ける文教の現状』190頁。
[44] 清水安三『のぞみを失わず』桜美林出版部、1951年、96から97頁。
[45] 前掲、清水郁子「学園のこのごろ」『支那之友』41号。
[46] 前掲、清水郁子「新装成らむとする学園」『支那之友』38号。
[47] 清水郁子「学園のこのごろ」『支那之友』41号。
[48] 前掲、清水郁子「学園のこのごろ」『支那之友』41号。
[49] 同前。
[50]「学園ニュース　体育館建築完成」『支那之友』45号、1940年５月。
[51]「学園点描　体育館の映画会」『支那之友』46号、1940年９月。
[52] 前掲、清水郁子「伸び行く日本　伸び行く学園」『支那之友』37号、1939年３月。